

ラブマシーンをもう一度

校長 村井 浩昭

去年の9月、ふと女子会に誘われた。(自分が出席する時点で女子会ではなくなるのだが。)数年前に愛媛から岡山に移り住んでいた一人が、また愛媛に戻ってくることになったので、再会を祝うという名目での女子会開催というわけだ。もともと私が30歳代を過ごした学校で一緒に働いた仲である。25年前、ミレニアム直前の頃だ。彼女たちのバイタリティーには感服する。忘年会の余興で「ラブマシーン」を歌って踊ろうという企画を立てた。「ラブマシーン」は、1999年の大ヒット曲である。なかなかメンバーに入らなそう堅物も、彼女たちの巧みな説得で落とされ、男性4名、女性3名、総勢7名が、彼女たちの指導でダンスを覚え、衣装も作ってもらい、当日は化粧にミニスカート、ストッキングといういでたちで歌い踊り切った。そんな思い出を語りながら、その頃のメンバー中心で集まりたいねという話になった。

年を重ねていくうちに、過去を懐かしむことが非常に多くなる。高校の友人の集まりも同じようなものだ。私は、三年間クラス替えのない同じ40人のメンバーとともに高校時代を過ごした。卒業したばかりの頃は大勢でよくクラス会を開いていたが、次第に愛媛やその近郊に住んでいる数名で、細々と集まることしかできなくなっていた。それが、高校時代の学び舎が老朽化で取り壊されることを知り、失くなる前に見学しておこうという企画が持ち上がり、SNSのグループにできるだけ招待していこうということになった。残念ながら40名のうち1名が20代のときに急逝しているが、誰かの呼びかけで、お墓参りを行うことにもなった。夏には、母校に集まり、お墓参りをしてから校舎見学をすることができた。参加できた者だけではあるが、卒業式後に撮影した写真と同じ場所とポーズで集合写真を撮った。SNSのグループが現在24名まで集まっている。6割という微妙な割合だ。残りの消息を探りたいところである。私のように教員をしている者、公務員、医師、歯科医、薬剤師、IT企業等職業は多岐にわたるが、SNS上でのやりとりは、高校時代に誰がこんなことした、あいつがこんな失敗したなど、いい大人とは思えない稚拙な会話ばかりだ。多分自分たちのクラスが一番楽しかったと思っている。

一学期の始業式で、ドラマ「不適切にもほどがある！」について話題にした。壇上から見ていると何人かの生徒が私の話にうなずいてくれていた。ドラマは昭和の主人公が昭和と令和をタイムトリップして行き来する話だ。そのタイトルを略した「ふてほど」が2024ユーキャン新語・流行語大賞となった。ドラマの中では、最近よく話題に上るセクハラやパワハラ、

コンプライアンスなどをテーマに双方の時代の良さや問題点を令和、昭和それぞれの視点で描いていた。正直なところ、さすがに大谷翔平選手に関する言葉が大賞だろうと思っていた人も多かったようだ。「ふてほど」を「不適切報道」のことと勘違いする方もおられたようで、これが大賞であること自体が話題となっていた。昭和という過去を知っている私たちは、当然当時は平成や令和という時代を知らない。しかし、年齢を重ねるうちに新しい時代を経験し、過去と対峙したとき、過去にもし自分の未来がわかっていたらなんて考えることがある。そんな気持ちを代弁していると思った昭和世代が、大賞に押し上げたのかもしれない。昨年3月上旬放送の「回収しなきゃダメですか？」というテーマの時、脚本家から原稿を回収する場面があり、脚本家は最終回が決まらないから原稿は出せないと言った。主人公はタイムトリップしているので自分と娘が1995年の阪神淡路大震災で亡くなることを知っている。主人公は自分の最終回を知っているわけだ。主人公が言う。「いつか終わる。ドラマも人生も・・・最終回が決まってないなんてさ、最高じゃん。俺に言わせりゃ最高だよ。」

2024年12月のとある日、

「VHSビデオ、ネットでDVDに落としてもらいました。映しますよ。」

「ニッポンの未来はWOWWOWWOWWOW セカイがうらやむYEAHYEAHYEAHYEAH」

よくこんなことできたなあきれながらも、ダンスが揃っていることで過去の自分たちに賞賛を贈っている。この頃は平成不況もあり、就職氷河期のど真ん中である。正社員をあきらめる若者も多かった。また、カリスマ店員、美容師などがもてはやされた時代だ。この数年YouTuberが人気職業に入っていることとよく似ている。どんな時代にも、辛いことや苦しいことがある。それを乗り越えてきたからこそ今がある。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。小松高校で学んだ仲間、いつまでたっても再会の度に高校生にもどることができる仲間たちだ。これからそれぞれの未来に向かうことになるけれど、未来が見えない時代が続いているとも言われている。どの道を選んでも最終回はわからないのだから、明るい未来を思い描きながら進んでほしい。そして、振り返ったとき、自分たちの高校時代が一番楽しかったと思えばいいのだ。

これから学び舎を巣立つ君たちの力が「セカイがうらやむニッポンの未来」を映し出す。